

誌碑：故・村瀬正夫さんを偲んで

古川 博

035-0086 青森県むつ市大湊上町25番33号

2003(平成15)年3月6日、岩手県北上市の村瀬正夫理事が急逝した。77歳。

同年、北海道・浜頓別で開催された、第31回総会・第27回研修会に参加の為、暫く振りでクッチャロ湖畔に立ち、湖面の白鳥達に双眼鏡を向けたのであるが、一番最初に飛び込んできたのがアメリカコハクチョウを交えた4羽のハクチョウの群れだった。咄嗟に、北上の「クロチャン一家」と思い、当然、もう来ておられるであろう村瀬さんご夫妻に、先ず、一報をと、「水鳥観察館」に赴いて、知らされたのが、村瀬正夫さんの訃報だった。

偶然の出会いだったのだろうか。それとも、「クロチャン一家」に托した、村瀬さん別離のメッセージだったのだろうか。一瞬、7年前、場所も同じ「白鳥の舎」そばの湖畔での「クロチャン一家」との出会いが脳裏をよぎり、そのときの情景にからだ全体が包まれて、しばし、茫然として佇んだ。

1996年4月27日、一千羽を越えるハクチョウの群の中から「クロチャン一家」を見つけた美江夫人が、声を張り上げて、呼び寄せ、北上から持参した好物のパンを与えていた。また、そのそばでは、福島の本木博・トミさん夫妻も、阿武隈川の「クロチャンモドキ」(アメリカコハクチョウ)を見つけ、呼び寄せていた。

寡黙で、物静かな村瀬正夫さんは、いつものように、美江夫人の後ろに立ち、じっと「クロチャン一家」を眺め乍ら、傍らの私に、『古川さん、出会う処は異なっても、ハクチョウ達は、相手が誰かよく識っているんですね。』と、一言話しかけ、また、「クロチャン一家」を見つめていた。

村瀬さんは、1986年3月、北上市に飛来したアメリカコハクチョウ「クロチャン」と出会い、爾来15年に亘っての「クロチャン一族」との触れ合いは、会誌「日本の白鳥」に寄稿、報告され、「黒い嘴峰の仲間たち」(自費出版)として纏められているが、緻密で詳細な観察記録は、野生の生きものに対し、一貫して変わらぬ、対等な立場と愛情をもって綴られており、餌付・給餌とハクチョウ保護、自然(環境)保全と人間(生活)等、今後「日本白鳥の会」が進む道の一筋を我々後進に示唆してくれている様にも思われる。

昨年の総会・研修会后、日をあらためて、北上市の村瀬宅を弔問に訪れた折、美江夫人から、『よろしければ、みて下さい。』と、幾冊にも整理されて束ねられた部厚い包みを手渡された。1995年3月17日、帰北のハクチョウと共に永久の旅路にむかわれた、我が師・三上士郎副会長と間で交わされた、「クロチャン」はじめ、ハクチョウ達の渡り・越冬地の様子等、諸々の鳥信書簡であった。

丁重に拝借して持ち帰り、手許に残されてある三上士郎先生の「野鳥記」と合わせ、読ませて載いたが、中に語られた両先生の白鳥に対する熱き・深き想いに引き込まれ、目を通しきれぬ儘、「追悼」の記も書けずに一年が過ぎ、二度目の秋を迎えた9月26日、名誉会長の松井繁先生ご他界の悲しいしらせを受けた。

夜半、毎夜のように、南下するハクチョウの啼鳴が上空を過ぎて行く。

黄泉の界へ松井先生を迎え、三人でハクチョウの秋の渡りなどを語っておられるのであろうか。もし、できるなら、わが鳥友、畠山正光老(2000年1月11日没)・田畑敏夫大兄(1997年8月12日没)を鼎談の中に入れて載きたい。

謹んで心からご冥福をお祈りする。

合 掌

平成16年10月28日